

# フランス語フランス文学

## ◇教員◇

教 授 塩塚秀一郎、王寺賢太

准教授 鈴木和彦、Raoul Delemazure

助 教 深田孝太朗

## ◇学生◇

学部 24名 修士課程 15名 博士課程 22名

### (1) 仏文研究室はどんなところか

フランス語をキー言語として、文学的テキストを読み解く力を養うべく切磋琢磨しあう者たちの集う場所。それがフランス語フランス文学研究室、略して仏文研究室である。

わが国ではこれまで、フランス文学は世界の文学の中でも特別の位置を占めるものとして熱心な受容の対象となってきた。泥棒詩人ヴィヨンの詩やラブレーの破天荒な『ガルガンチュア』から、バルザックやプルーストによる偉大なる小説の探求、ボードレールやランボーによる尖鋭的な詩の冒険。そしてシュルレアリスムから実存主義、構造主義に及ぶ、さまざまな思考の展開に至るまで、フランス文学の歩みは私たちを惹きつけてやまない刺激的局面に満ちている。その魅力と真に触れあうためには、フランス語の原書をひもとく以外に道はない。原典のページを開き、辞書を頼りにひたすら読み進める。それは異国の言語のただなかをさすらう旅への出発にほかならない。仏文研究室では、その旅に必要な知力、体力をはぐくむためのトレーニングが多様な形でほどこされる。

同時にまた、仏文研究室が根本的にきわめて自由で、学生がそれぞれの道を進むがままに任せる寛容の精神を旨とする場所であることも強調しておこう。ラブレーが『ガルガンチュア』中で描き出した理想境である、テレームの僧院を律する規則「汝の欲するところをなせ」は、そのまま仏文のモットーである。小林秀雄や太宰治、大江健三郎を始めとして、これまで東大仏文がおびただしい数の文学者、著述家、そして芸術家を生み出してきた背景には、そうした不羈独立を尊ぶ精神的土壌がある。その伝統はいまも脈々と受け継がれている。

もちろん、教員側はただ放任をこととするのではなく、学生からの質問や相談に喜んで応じ、学生との対話を何よりも大切に考えている。また仏文研究室は修士・

博士課程の学生を多く有する。彼らは先輩として気さくにアドバイスを与えてくれることだろう。

## (2) 仏文ではどのような授業がなされているのか

講義、演習ともに仏文の授業の基本は「**訳読**」である。読んで訳すという語学習得のスタイルは今日、不当な蔑視にさらされている。だが、初級文法の知識を実践の場に活かしつつ、日常会話のレベルを超えた複雑で豊かな意味を含みもつ文章をじっくりと読み解くために、そして自らの理解度を確認しつつ進んでいくためには、訳読ほど頼りになるメソッドは存在しない。冠詞ひとつおろそかにせず、時制や法に十分注意しながら自分の読み取ったところを日本語に移してみることで、いったい自分には原文がどこまで読めているのか、そしてどのような点に理解の不足があったのかがはっきりする。そうやって講義は、各自の準備してきた解釈と教師の解釈とが時にはしのぎを削り、照射しあう場となる。フランス語という異国語で書かれたテキストの「**正体**」を、ともに力を尽くして明らかにしていくことが、仏文の授業の醍醐味である。

もちろん、訳読だけで十分だというのでは毛頭ない。フランス語を**聞き、話し、そして書く**練習もまたたつぷりと積む必要がある。仏文では現在、フランス人教師による授業を週2回開講しており、実践的なフランス語力をいくらでも伸ばしていけるだけの環境が整っている。

2008年度からジュネーヴ大学への、そして2018年度からはさらにパリ第8大学への留学生派遣制度が設けられたことも特筆しておこう。毎年、学部ないし大学院の学生を派遣し、一流の教授陣の講義・ゼミに出席してフランス語の習得に励むと同時に、文学研究の基礎的知識・方法論を学んでもらう。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりとさまざまである。留学を希望する学生は、フランス語力に研ぎをかける必要があることはもちろん、留学事情について自分で情報を収集したり、経験のある先輩方に話を聞くなどの準備を進めたりする必要もある。全学交換留学に制度が変わったことにより、フランスのストラスブール大学、グルノーブル・アルプ大学への語学研修留学が可能となったことも付言しておく。

また、仏文研究室は世界のフランス文学研究者や作家、批評家がひんばんに訪れる、国際的な交流拠点の一つであり、いわば東京にいながらにしてソルボンヌの講義に連なる気分を味わうような機会に事欠かない。

## (3) 教員の専門と授業

ここで仏文科の教員をご紹介します。現在、専任教員は4名である。

**王寺賢太教授**は、モンテスキュー、ルソー、ディドロなど18世紀フランスの哲学者の政治・経済・歴史思想が専門。そのかたわらアルチュセールやフーコー以下、20世紀の哲学者たちの仕事にも旺盛な関心を示してきた。現在、Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des Européens dans les deux Indes* (Centre international d'étude du XVIII<sup>e</sup> siècle) の批評校訂版共同編集責任者。著書に『消え去る立法者 フランス啓蒙における政治と歴史』(名古屋大学出版会)。著編著に日本の「近代の超克論」を再検討する *Éprouver l'universel. Essai de géophilosophie* (Kimé、共著) や、「68年の思想」の意義を説く『現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学』(平凡社、共編) など。講義では、上記の18世紀と20世紀の作家・思想家を中心に、〈考えること〉と〈書くこと〉・〈読むこと〉の関係に焦点をあわせて講義を行っている。

**塩塚秀一郎教授**の専門は、ジョルジュ・ペレックなどウリボ作家を中心とする近現代文学。著書に『ジョルジュ・ペレック 制約と実存』(中央公論新社)、『レーモン・クノー 〈与太郎〉的叡智』(白水社)、『逸脱のフランス文学史 ウリボのプリズムから世界を見る』(書肆侃侃房)、クノーにおける〈知〉の概念を検討した仏文著書 *Les Recherches de Raymond Queneau sur les fous littéraires. L'Encyclopédie des sciences inexactes* (Eurédit) がある。近年はフランソワ・ボン等の近現代作家について、都市の日常、プロジェクト・アート、歩行などのテーマを設定して研究している。また、Eの文字を使わずに書かれたフランス語原文を〈い段〉抜きの日本語に翻訳したペレック『煙滅』(水声社)のほか、クノー『あなたまかせのお話』(国書刊行会)などの訳書がある。近年の演習・講義では、レリス、ゾラ、ボンジュ、ヴェルヌ、ネルヴァルなどの原書講読のほか、アトリエ・デクリチュール(文章教室)の実践を行っている。

**鈴木和彦准教授**の専門はシャルル・ボードレールを中心とする19世紀文学で、フランスにおけるロマン主義の盛衰の諸相を歴史的に考察している。文学作品ではとりわけ詩を専門とし、現代詩人の翻訳紹介にも取り組んでおり、ミシェル・ドゥギー『ピエタ ボードレール』(未来社)やジェラルム・マセ『オーダーメイドの幻想』(水声社)などの訳書がある。授業では19世紀文学講読(ボードレール、ランボー、フローベール、ユゴーなど)、中世から現代にいたる仏語詩講読(デュ・ベレー、デボルド=ヴァルモール、セゼール、サクレなど)のほか演劇、あくまでも自分の声と体で実地に演じるものとしての演劇に関心があり、演習では新旧の戯曲をフランス語で上演する(モリエール、イヨネスコ、レザ、ポムラなど)。これはゆくゆくは授業の枠を越えたフランス語演劇集団を立ち上げる計画であり、興味のある学生諸氏の参加を心待ちにしている。

**Raoul Delmazure准教授**の専門はジョルジュ・ペレックとロラン・バルトを中心とする20世紀文学。著書に*Une vie dans les mots des autres. Le geste intertextuel de Georges Perec* (Classiques Garnier)があり、このなかでは現代文学における間テキストの利用がいかなる形式を持ち、いかなる問題をはらむのかが分析されている。現在は*Dictionnaire Georges Perec*の出版を準備中。最近の研究では、引用やモンタージュといった芸術形式の歴史と、芸術家によるそれらの形式の活用の関係に注目している。芸術家は主観的なやり方で、特定の歴史的・社会的文脈にのっとった意味を形式に与えるのである。近年の演習・講義では、研究の方法論やアカデミック・ライティングの授業のほか、フロベール、ジッド、セリーヌ、シャール、カミュ、デュラスといった19世紀・20世紀の主要な作家の講読を行なっている。

フランス語学フランス文学の研究対象は多岐にわたるため、専任教員だけではとてもカバーしきれない領域が残る。そうした領域については、毎年学外から専門家の方々を非常勤講師として招き、その研究成果をご披露いただいている。今年度は、高名康文講師（成城大学・中世文学）、浜永和希講師（19世紀詩）、鈴木雅生講師（学習院大学・20世紀文学）、木島愛講師（千葉工業大学・言語学）に出講をお願いしている。それぞれの専門を活かした講義では、フランス語学および古フランス語、近代詩、現代文学の専門的研究を通じて、幅広い専門分野を学ぶことが可能である。

フランス文学は時代順にいつて武勲詩・聖杯伝説などの中世文学、人文主義、古典主義、啓蒙主義、ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義という文芸思潮をたどり、しかもそのすべてにおいて時代の先端をゆく作品を産み出してきた。一国文学でありながらヨーロッパ世界の精神史の流れを先取り、ないしリードしたとってよく、これをたどることによって、副産物として、世界文学への展望を容易に把握することもできる。学部でその基本をまず学ぶことによって、複雑な様相を呈している現在の状況への認識をさらに深める道が切り開かれることだろう。

#### （４）卒業後の進路

一般企業や金融関係、公務員、あるいは新聞・放送・出版、さらには図書館関係や教職など、多岐にわたっている。ただし教職に関しては、現状では高校段階まではフランス語担当で教職につくことはほとんどありえないため、在学中に英語、国語その他の教科単位を修得するものが多い。

また、学部2年間の学習では物足りないという諸君は、大学院修士課程に進学して研究を深めることをお勧めしている。大学院入学希望者は、本学以外からの志望者も含めて定員の約3～4倍程度。最近、修士号を取得した上で就職する学生が

増え、一般企業や、新聞・出版関係に就職している。なお、博士課程に進学すると将来はほぼ教育職研究職に限定され、その就職先は容易には見つからない。博士課程への進学に際しては、自分の適性と待ち構えている苦しい将来を考えあわせた上で、相当の覚悟をもって臨む必要がある。

#### (5) 最後に

仏文においてすべての基本となるのはフランス語力だが、これは地道に練習を重ねればだれでも等しく上達を望めるものである。努力さえ怠らなければ、ある時点で急に自分が「離陸」した実感を抱けるはずだ。聞き、理解する力さえあれば、インターネットを通して24時間フランス語に接することができる現在の環境を積極的に活用し、世界をどんどん広げてほしい。各自が自由に、のびのびと学ぶのが仏文研究室の伝統であることをもう一度、強調しておこう。臆せずその門をくぐっていただきたい。



鈴木和彦准教授「フランス語学フランス文学特殊講義 フランス語で演劇を上演する」  
サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』上演の様子（文学部3番大教室）